



金子信久著「[かわいい絵]の論理と歴史」より

さて、江戸時代、本格的な「かわいい絵」の時代が到来する。その幕開けが、江戸時代の前半、17世紀から18世紀前半である。幕藩体制が布かれ、世情は安定し、都市経済も発達したこの時代、それまで文化とは縁遠いところにあった人々もまた、文化の担い手となった。とはいえ前半期のそれは、まだ有力な武家や寺社といった従来の権力者が中心だったが、そんな中に富裕な町人が参入したり、素朴ながらも、町人による町人のための楽しみとしての浮世絵も登場した。美術が特定の権力だけに属するものではなくなったことは、絵が描かれる目的や表現手法の拡大にもつながる大きな出来事である。

(中略)

そして、江戸時代後半、およそ18世紀半ばから19世紀前半にかけて、「かわいい絵」は爆発的な隆盛をみる。それはまさに、円山応挙や長沢蘆雪、伊藤若冲、更には池大雅や与謝蕪村ら南画家たちも交えて、画家たちが個性を競った、日本絵画の絢爛の時代にも重なっている。

(中略)

古来の決まった画題や宗教的な目的の絵、吉祥画のような実用的テーマだけではなく、「心模様を描く楽しみ」が広まったのが、この時期ではないだろうか。人や動物の親子を慈しみ深く描いてみたり、健気で胸をきゅんとさせるような場面を描いたり、小さな心の動きそのものが、さまざまな作品に表現されている。例えば、森狙仙は驚くほどリアルに猿を描いた画家として知られているが、彼の作品の核心は単なる迫真性ではなく、23や24の作品のような、一匹一匹の猿の心持が想像できる面白さにある。

(中略)

中心となったのは、京の円山応挙である。応挙は、何かを描く際、単なる頭の中のイメージや従来の手本からは離れて、客観的に突き放して考え、平面上に表すことを研究した、つまり、それまでの絵のあり方を根本から考え直した画家だった。そうして、まるで本物がそこにあるようなイリュージョンの面白さを打ち立てたのである。応挙の画風は一世を風靡し、「絵とはこういうものだ」という従来の観念を覆すその近代的描写レベルは、絵画界の新たな「標準」となった。子犬が見せる無限の動きの中から「かわいい見え方」の一瞬をつかみ取り、それを一つの形に置き換える目と技術。子犬という、現代人も手放して感嘆の声を上げる応挙のトレードマークは、そんな新次元の研究から生まれたのである。

金子信久著 「かわいい絵」の論理と歴史『かわいい江戸絵画』府中市美術館編 求龍堂2013年



円山応挙 《狗子図》(部分) ミネアポリス美術館